

特別企画展報告

## 孤高の作曲家 マックス・レーガーとユーモア

伊藤 綾<sup>1)</sup>

1) 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学

本学の鹿児島国際大学ミュージアムと、筆者の科研費研究対象であるマックス・レーガーに関する研究の合同企画として、『孤高の作曲家 マックス・レーガーとユーモア』展（2017年7月16日～9月29日）とそれに付随したミニコンサート（2017年7月16日）を開催した。

ドイツ人作曲家マックス・レーガー（1873～1916）は後期ロマン派の作曲家・オルガニスト、指揮者として活躍し、数多くの作品を遺したが、早逝であったことと難解な曲が多いことが災いし、とりわけ日本では作品が演奏される機会は少ない。しかし2016年に没後100年を迎えたことから、レーガー作品を見直す動きが欧米で始まり、その波に乗って日本にもレーガーとその作品を広めていくのが筆者の当面の課題である。

したがって、本学ミュージアムにおける企画展の主旨は、マックス・レーガーという作曲家をより多くの人に知ってもらうことと、そのための準備に本学国際文化学部の学生を積極的に関わらせることとした。企画展の準備作業には音楽学科と国際文化学科の学生で役割分担を行なった。

筆者の「音楽学概説」を受講している音楽学科の学生6名は、展示資料および配布パンフレットの文章とレイアウトの作成を担当。当初、受講生は全員マックス・レーガーについての知識は皆無であったため、まずは彼の生涯や人柄、そして作品を知ることから始まった。そのために、各種辞典や文献の読み方、情報のまとめ方、そして学術的な文章の書き方を学んでもらった。ドイツ・カールスルーエ市にあるマックス・レーガー研究所より、豊富な写真資料を提供していただいたこともあり、作業を続けるうちに学生はレーガーに愛着を持ってくれたようである。

一方、鐘ヶ江学芸員の担当する学芸員資格過程を受講する国際文化学科の学生5名は、音楽学科学生の作成した文章やレイアウトを元に、展示パネルやパンフレット、ポスター、チラシのデザイン・印刷、そして模型作成に取り組

んだ。学生たちの奮闘のおかげで、展覧会は無事に本学のオープンキャンパスに合わせて開催することができた。

また前述の通り、展覧会初日には8号館のミニ・コンサートホールにて、ミニコンサートも合わせて開催した。ここでは、国際文化研究科で音楽を論文のテーマにしている大学院生5名（修士課程4名、博士課程1名）が、本学のウーヴェ・ハイルマン教授より声楽の指導を受け、レーガーの独唱曲と重唱曲を非常勤講師である大迫貴氏のピアノ伴奏で披露した。また、レーガーと各楽曲に関する説明は伊藤が行った。コンサートの来場者には、レーガーと展覧会に興味を持って頂けるように、展覧会のパンフレットを配ったことが功を奏し、コンサート後に展覧会場へ足を運んでくださった方も少なくなかったようである。

マックス・レーガーに関する展覧会は、日本どころかアジア諸国でも開催されたことがなく、今回のものがアジア初の試みである。ドイツのマックス・レーガー研究所はその点を大変評価してくださった一方、入場者数や展覧会とコンサートの認知度は理想的ではなかった。展覧会やコンサートを開催するまでの過程は、アクティブラーニングの点で成功したと考えられるが、運営の点ではとりわけ宣伝の面でもう少し工夫が必要であったように思う。



特別企画展「孤高の作曲家 マックス・レーガーとユーモア」展示室のようす